

AI共生時代における診療放射線技師職能の再定義

江藤 芳浩

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長

近年、医療分野におけるAI技術の進歩は著しく、単なる技術導入の段階を超え、医療の質と効率を大きく変革する「AIとの共生時代」が本格的に始まっています。特に画像診断領域では、逐次近似再構成技術による低被ばくと高画質化の両立、撮影部位の自動認識によるポジショニングの最適化、肺結節などの病変解析といった技術がすでに実用化されています。これらの進展により、診療放射線技師が担ってきた「画像を作成する」というルーティンワークの多くは自動化され、検査の標準化が進み、施設規模や担当者の経験に左右されない一定水準以上の画像提供が可能になりつつあります。



その一方で、「診療放射線技師の役割はどうか」「将来、職能そのものが揺らぐのではないか」といった不安の声が聞かれるようになりました。いま求められているのは、変化を恐れることなく、自らの職能をどのように定義し、社会に示していくのかを主体的に考える姿勢です。

まず、明確にしておきたいのは、AIは医療行為の主体にも責任主体にもなり得ないという点です。AIは画像から所見を抽出することはできても、その結果に対する説明責任や法的責任を負うことはできません。またAIの性能は入力される画像の質や撮影条件、運用環境に大きく依存します。つまりAIが診療に深く組み込まれるほど、「どのような画像が、どのような過程を経て提供されるのか」がこれまで以上に重要になります。

診療放射線技師は、単に装置を操作して画像を取得するだけの職種ではなく、検査目的を踏まえた撮影条件の設計、被ばくを含む安全管理、画像品質の保証など、医療行為が適切に成立するための基盤を担う専門職です。この本質はAI時代になっても変わることはなく、むしろその重要性は一層明確になると考えています。その上で、AI時代における診療放射線技師の職能は、医師の指示の下で放射線を人体に照射する行為を担う専門職として、「画像診断および画像を用いた医療行為が、安全かつ有効に成立するための基盤に責任を持つ存在」として再定義されるべきでしょう。そこにはAIの原理や学習データの特性、統計学的限界を理解し、AIを“魔法の杖”ではなく、特性を持った“高度な道具”として適切に使いこなすAIリテラシーも含まれます。つまり診療放射線技師は「撮る人」にとどまらず、「診断が成立する条件を整え、その質と安全に責任を持つ専門家」へと進化していく必要があります。技術の進化を恐れるのではなく、知的好奇心を持って受け入れ、自らの役割を柔軟に再定義していく姿勢が、次世代の放射線医療を切り拓く原動力になると考えています。

この職能の再定義は、職域拡大を主張するものではなく、診療放射線技師が引き受けるべき責任を明確にすることで、医師や他職種との役割分担をより健全なものとし、国民からの信頼に応えるためのものです。医師が診断・治療の最終判断を担い、その判断を支える画像・機器・AI運用に責任を持つのが診療放射線技師であるという役割の明確化が重要だと考えています。

AI時代の到来は、専門性が失われることを意味するものではありません。むしろ診療放射線技師の価値と責任をより明確に社会へ示す絶好の機会です。会員一人一人が診療放射線技師の職能の再定義を自覚し、次の時代の医療を支える担い手として誇りを持って歩み出すことを期待しています。